

## 本連載における「翻訳」について ④

今回も引き続き、ユルゲン・ハーバーマスの「翻訳」にまつわる議論の有用性や限界について、様々な研究者から提起された論点を参照しながら話を進めていきたい。

## 宗教的市民と世俗的市民の非対称性 (続き)

前回(3月号)では、政治学者の木部(2013)の議論を参照しながら、ハーバーマスの唱える「共同翻訳」は、宗教的市民と世俗的市民それぞれに対して「非対称性」をはらんでいることに触れた。その上で、宗教的市民については二つの問題があり、その内の一つは、「翻訳付帯条件」が宗教的市民にのみ適用されている点であると紹介した。

次に二つ目の問題についてであるが、それはハーバーマスが宗教を「特別視」しているのではないかという指摘である。一つ目の論点と似通って聞こえるかもしれないが、これは宗教的市民と世俗的市民そのものの対比ではなく、政治的な討議をする際には様々な思想に依拠することが考えられる中で、なぜ宗教だけが特別扱いを受けてしまうのか、という論点である。

この点を論じるにあたり、木部はチャールズ・テイラーのハーバーマスに対する批判を参照している。木部が依拠しているテイラーの論稿を参照すれば、テイラーは近代世俗国家における「国家の中立性」について、「国家はキリスト教国家でも、イスラーム国家でも、ユダヤ教国家でもありえないが、同時に「マルクス主義国家でも、カント主義国家でも、あるいは功利主義国家であることもない」と述べた上で、「国家の行う決定は、そうした価値観のいずれかを特に認めるかたちで行うことは許されないと指摘している(テイラー 2011 = 2014: 55)。そして続いて、「国家の中立性とは基本的には多様性への応答であるという考え方が、「西洋の『世俗的』な人々のあいだにまだまだ浸透して」おらず、「宗教は訳のわからないもので、脅威になることすらあるという見方におかしなほどのこだわりがある」(同上: 55 ~ 56)と指摘し、その背景を以下のように説明する。

こうした見方が強まっているのは、リベラルな国家と宗教とが今も昔も無数の争いを繰り広げてきたからだけでなく、宗教的なものと世俗的なものとが認識として区別されているからです。宗教の影響下にある思想は、純粋に「世俗的な」推論と比べてどこか合理的ではない、とされています。こうした見方は、政治的な根拠(宗教を脅威とみなす立場)だけでなく、認識論的な根拠(宗教を誤った推論形式とみなす立場)にも支えられています。

(同上: 56、強調点は原文ママ)

テイラーは、こういった考え方が生まれる背景には、宗教的な啓示ではなく人間の理性のみによって人間の問題を理解しようとする啓蒙の考え方が根底にあることを指摘する(同上: 57 ~ 58)。そして、ハーバーマスにもそういった認識が見られる

としたうえで、ハーバーマスが「非宗教的なく理性」に「特別な地位を与えている」と論じている(同上: 58)。これは言い換えれば、宗教的な言語に対して非宗教的な理性に優位性を与える認識と言うことも出来るだろう。

ここまでのテイラーの議論を踏まえた上で木部の議論に立ち戻れば、木部はハーバーマスが宗教を特別視するのは、「宗教が絶対的な真理の権威に基づく」と認識しているからであると述べている(2013: 73)。そして、木部はハーバーマスのドイツ語の著作を参照しながら、「世俗的な倫理的観念」とは異なり、「信仰に基づく確信」というものは「討議による変容を受け付けない」とハーバーマスが想定しているとの見解を述べている(同上: 73)。すなわち、宗教は妥協を許さない絶対的な真理の権威に基づく価値観であるので、討議をしたとしても意見を変えたり調整することがあり得ないため、宗教的言語には翻訳を求めるといふ特別扱いが生まれるというわけである。

さて、ここまで宗教的市民側の非対称性を述べてきたが、最後に世俗的市民に関わる非対称性について述べておきたい。それについて木部が指摘するのは、世俗的市民は自分自身の宗教に対する価値判断に拘わらず、「宗教的言語が<翻訳>するに値する意味内容をもつ言説であることを承認しなければならない」(木部 2013: 66)という点である。これはつまり、世俗的市民が自己の信条として宗教的真理を拒否する立場をとっていたとしても、それを公の場で表明できなくなることを意味する。この点を挙げる際に、木部はクリスティナ・ラフォントの議論を参照しているが、同著者は別の論稿でもこの点に触れており、「世俗的市民は公の場において、宗教には『認知的な価値がない(no cognitive substance)』とする認識の態度をとれなくなる」と述べている(Lafont 2007: 247)。そして木部は、こうした認知的態度が求められることによって、「宗教にたいする否定や拒絶の声が抑制され」てしまい、それによって「公共圏のポリフォニー性は縮減し、意見や選好の変容の場としての公共圏の役割もそれに対応して減じることになることが予想される」と指摘している(2013: 67)。

## [参考文献]

木部尚志「共同翻訳と公共圏のポリフォニー——ハーバーマスの<ポスト世俗社会>論一」『年報政治学』64巻1号、2013年、60~80頁。

チャールズ・テイラー「なぜ世俗主義を根本的に再定義すべきなのか」エドゥアルド・メンディエッタ、ジョナサン・ヴァンアントワーペン編(箱田徹、金城美幸訳)『公共圏に挑戦する宗教——ポスト世俗化時代における共棲のために——』岩波書店、2014年、33~62頁。

Lafont, Cristina. 2007. "Religion in the Public Sphere: Remarks on Habermas's Conception of Public Deliberation in Postsecular Societies." *Constellations* 14, no. 2: 239-259.